

地方創生の近未来

～伝統の現代化とスマート・スプロール～

さとう じゅん
佐藤 淳

金沢学院大学経済学部 教授

(前 一般財団法人日本経済研究所 調査局 上席研究主幹)

1. 地域産業への希望

中国の台頭に象徴されるような規模の経済から、欧州型ブランドのような価値（差別化）の経済へ、良いものをより安くから、より高くへ、量から質へと、地域産業への希望は、方向性としては固まったように感じる。また、人口減少の局面においては、それ以外の選択肢に乏しいのも事実だ。

実際に、コモディティ商材が減少を続け、量的には不振である日本酒が、高級酒は輸出を含めて好調に推移するなど、地域産業のなかには、その期待を現実化しつつある分野も散見される。

本稿では、まだ仮説に近いが、地域産業や地域そのものが、このような発展プロセスに到達するための方法論を論じてみたい。

2. 規模の経済と差別化

規模の経済は、大きいことによる効率性を利益の源泉にする。それは、工場やビルのコストが表面積で、その性能が容積で近似されると考えると単純明快だ。表面積は2乗だが、容積は3乗である。大きくなるほど、コストより性能がアップし、効率的となる（2乗3乗の法則）。

さて、以上は固定費の話だ。規模の経済が成立するには、もう一つ、変動費が固定費に比べ低廉である必要がある。オイルショック前の日本において、大規模な臨海型工場が成立したのは、そのためである。一方、国際的に割高となった電力費のもとで

は、中韓台のように巨大な半導体工場を成立させるのは難しい。

このように、規模の経済の話はシンプルである。では、規模の経済が成立し難くなったわが国において、特に、かつては電気機械を中心とした誘致工場によって繁栄してきた地方圏はどうすればいいのか。その答えが差別化である¹。良いものを作る。機能や品質によって差別化を図る。実際これは、かなりの程度成功を収めた。

しかし、差別化の弱点は、時間が経つと真似されやすいことだ。特許があっても、その権は、いずれは切れる。なければ、そのタイミングはもっと早い。極端には、一発屋芸人のように、一時的には差別化に成功したものの、消え去るケースもある。このように、独り占めの差別化していた状況から、過当競争に近くなることを、独占的競争と称する。名前は難しいが、世の中の的には多い話だ。日本も1980-90年代は全体として差別化に成功していたものの、多くはキャッチアップされてしまった。その結果、地方にあった誘致工場も少なくなってしまったのである。

3. テロワール

では、どうすればいいのか。最も理想的なのは、フランスのブランドワインのように永続的な差別化を実現することである。差別化には2種類ある。垂直的差別化と水平的差別化だ。垂直的差別化は、機能や品質の違いを訴求するタイプだ。一般的には、

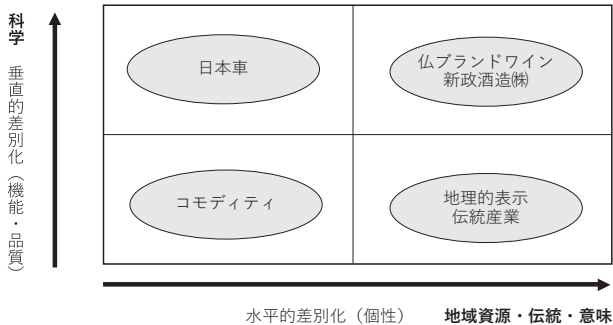
¹ 規模の経済は、価格による垂直的差別化の一種であるが、混乱を避けるために、本稿では、機能と品質による差別化に絞る。



【佐藤淳氏のプロフィール】

金沢学院大学経済学部 教授
1962年 宮城県生まれ。日本開発銀行（現日本政策投資銀行）、
日本経済研究所を経て、2020年4月より現職。専門 地域産業
論。博士（総合社会文化）。

図1 垂直的差別化と水平的差別化の連動



出所：筆者作成

垂直的差別化の方が多い。他方、機能や品質によらない差別化を水平的差別化と称する（図1）。

フランスのブランドワインは両方を駆使している。品質で高い評価を得て、例えば、パーカーポイントで高得点を獲得しているのは、垂直的差別化だ。さらに、地理的表示によって、水平的差別化にも成功している。

垂直的差別化では、前述のようにライバルが追い付いてくることが多い。ところが、ワインの場合には、品質を決めるブドウの出来が土壌や気候風土の影響を大きくうけるように見える。そこで、フランスは、当該土地の個性がワインの品質であるという、美意識・価値観を創造した。科学的には異論もあるが、これをテロワールという。この美意識・価値観が消費者に浸透すると、フランスワインを真似することが不可能に近くなったのである。テロワールは水平的差別化の大成功例だ。

特に素晴らしいのは、垂直的差別化と連動し、永続的な高級ブランドを創出していることだ。このようなことがわが国の地方圏において実現できないだろうか。

4. 美意識・価値観による水平的差別化

美意識・価値観による水平的差別化と垂直的差別化が連動している日本の例を示そう。秋田の新政酒造(株)と金沢駅である。

(1) 秋田の新政酒造(株)

秋田の新政酒造(株)は、山同によれば、「もっとも旬な酒」である（山同、2016、p.124）。評論家だけではなく、一般消費者の支持も高い。消費者の採点による日本酒ランキングを公表している SAKE TIME によると、20位までに、新政酒造(株)の4銘柄がランクインしている（2020年6月23日現在）。1銘柄だけでも難しいのである。

新政酒造(株)が高い支持を集めている背景には、品質の垂直差別化をもたらしたイノベーションと、美意識・価値観による水平的差別化がある。

垂直的差別化・イノベーションは、生酏の革新である。生酏は江戸時代に開発された伝統技術であるが、明治以降廃れていた。この手法を、現代科学を用いて、完成度を高めて復活させたのである。

日本酒の酒造工程は、「一麴、二いちこうじ酏、三にもと造り」と称される。まず、麴を造り米の澱粉を糖に変える。次に、酒母（酏）で酵母を培養して糖をアルコールに変える。そして、酒母（酏）をベースにして量を造る。

酒母（酏）には、乳酸環境が必要となる。乳酸によって他の微生物を排除し、清酒酵母を迎え入れる環境を整えるのである。

乳酸はもともと、米と水を桶（タンク）の中で、權で摺って生成を促進してきた。これが生酏と呼ば

れる江戸時代に確立された工程だ。

生酏による乳酸生成過程は次の通りである。まず、水中の硝酸イオンをベースに硝酸還元菌によって亜硝酸イオンが生成され、それが野生酵母を抑制する。硝酸還元菌と同時に乳酸球菌が、次いで乳酸桿菌が増殖し、乳酸を生成し、雑菌及び硝酸還元菌を抑制する。

ところが、従来の生酏には弱点があった。一連の工程に多くの時間を要し、生産性が低い。しかも、開放系の反応装置（桶・タンク）によって実施することから、雑菌の排除が難しかったのである。

このため、明治末期に乳酸を直接投入する速醸という手法が開発された。速醸は時短によって雑菌に侵されるリスクを減じた。同時に生産性も高いために、広く普及した。今では、それ以外の手法（生酏等）が珍しいぐらいである。

しかし、便利な速醸にも弱点がある。生酏には野生酵母を排除する亜硝酸反応があるが、速醸にはない。このため、理論的には、雑菌を排除できた生酏の方が酵母の純度が高くなる。もっとも現実としては、開放系の生酏では、雑菌の排除が難しかったのは上述の通りだ。

工程の説明が長くなってしまったが、新政酒造(株)のイノベーションは、生酏の弱点である開放系プロセスを閉鎖系に転じたことにある。雑菌を排除し、



写真1 新政酒造(株)の生酏イノベーション
(左：新政方式、右：従来方式の木桶)

注：木桶に被せてあるビニールは展示のため
出所：筆者撮影

純度の高い生酏を生成することに成功した。速醸よりも優れた酒母を完成させたのである。

生酏造りの開放系プロセスとは、櫛で摺ることができるタンクである。桶のイメージの方がしっくりくるかもしれない。これに対し、新政酒造(株)はビニール袋を用いた。それを手でこねることによって櫛摺りを代替し、閉鎖系のプロセスを安価に実現したのである（写真1）。

このように記すと、簡単なことのように思えるかもしれない。しかし、生酏製法はビニールが存在しない時代に確立されたものだ。科学的な分析も少なく、その形式のみが伝わっている。したがって、その型の意味内容を理解することは容易ではない。そして、どちらかといえば、櫛で摺る型が優先されてきた。

それを、新政酒造(株)では、古い文献と科学的分析により、生酏の型ではなく、意味内容を解釈し直した。江戸時代では不可能であったが、現代では可能な資材のもとで生酏の工程を再定義したのである。

その結果、純度の高い酒母を得ることが可能となり、繊細な風味が可能となった。新政酒造(株)の酒質は前述の通り消費者から広く支持を集めている。

これは、日本酒製法のイノベーションとでもいいだろう。百年ぶりの技術革新である。品質を向上させる垂直的差別化に該当する。

さらに、新政酒造(株)では、そこに地域性を織り込む水平的差別化にも挑戦している。地域性を織り込む要素は、米、水、地域微生物である。そのベースにある美意識・価値観は、「添加物を使わない」「地産地消」「なるべく自然に」というものだ。

添加物を使わない方針は、上述の生酏改革にもつながった（乳酸無添加）。さらに、仕込みタンクを、杉の木桶に切り替え始めた（写真2）。また、秋田市中心部から東へ20キロメートルほどのところにある「鶴養」地区で、無農薬栽培で酒米作りをする

行っている（入山、2017）。

しかし、木桶は、ホーローのタンクよりも雑菌の制御が難しい。そのため、木桶ではなくホーローのタンクが雑味の少ない良い酒をもたらすのが日本酒業界の常識である。新政酒造(株)の取組みは、非常識と受け止められている（図2）。

新政酒造(株)では木桶を使用することにより味に深みを持たせようとしている。極端に言えば、雑菌を有効活用しようとしているのである。

これは、その前の工程（生酛による酒母）において、完全に雑菌等を排除しているために可能となったものとみられる。



写真2 新政酒造(株)の木桶

出所：筆者撮影

一般的な速醸による酒母では完全な野生酵母の排除はむずかしい。したがって、その後の造り（仕込み）の工程において、なるべく微生物の影響を排除したい。

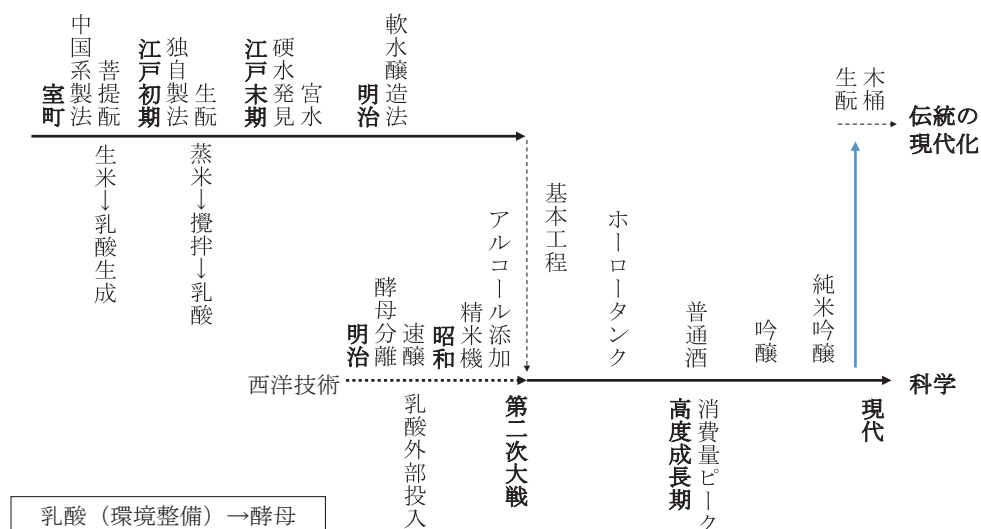
他方、純粋な酒母を作るイノベーションに成功している新政酒造(株)では、その後の造りにおいて、冒険が可能になったと思われる。

新政酒造(株)の冒険は、水平的差別化を可能とする。木桶に住み着いた微生物は、地域の個性といえるからである。ワインのテロワールになぞらえれば、微生物（マイクロオーガニズム）テロワールといえる（図3）。

ワインの場合には、ブドウの品質が土壌や気候風土の影響を大きく受けて、その結果ワインの品質が土地の状況に左右される、いわゆるテロワールがわかりやすい形で存在する。果実を原料とするワインは原料の特性が直接反映されるためだ。

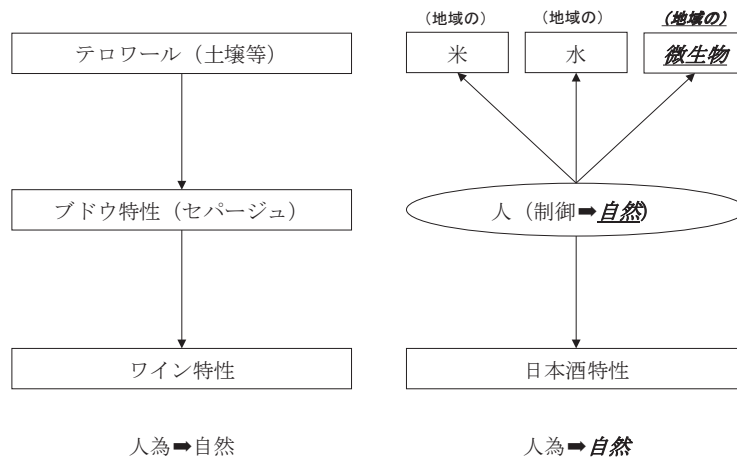
他方、米は風味に乏しい穀物である。したがって、米だけで日本酒の風味を説明することには無理がある。他の要素である水や、特に微生物の関与が大きい。新政酒造(株)のようなやり方は、地域の微生物

図2 日本酒の伝統と西洋科学



出所：佐藤（2020）

図3 微生物（マイクロオーガニズム）テロワール



出所：佐藤（2020）

物を因果関係に取り込むことを可能とする。

しかも、その背景には、「添加物を使わない」「地産地消」「なるべく自然に」といった美意識や価値観がある。消費者がその価値観を支持すれば、微生物（マイクロオーガニズム）テロワールが機能し、水平的差別化が成立するだろう。それは、既にかかなりの程度成功しているのように見える。

新政酒造(株)では伝統工程に現代技術を持ち込んで品質を向上させるという垂直的差別化と、無添加や地域性を活かすという美意識・価値観による水平的差別化が連動している。そして、その連動により、日本酒では珍しい地域性を織り込んだ高級ブランド化に成功しつつある。

(2) 金沢駅

金沢駅も垂直的差別化と水平的差別化の連動に成功していると思われる。旧金沢駅は、鉄筋コンクリート4階建ての、風情があるとは言い難い建物であった。機能・品質面からみても、新幹線に対応しておらず、東西の通り抜けも難しいなど、劣っていた。

旧金沢駅は、北陸新幹線の延伸に対応して、リニューアルされた。機能・品質の改善は、他の新幹線駅と同様に実施された。垂直的差別化である。

金沢駅がユニークなのは、木造建築物の鼓門がデ



写真3 金沢駅

出所：筆者撮影

ザインとして重要な地位を占めていることにある（写真3）。

このデザインの検討に、金沢市は長い時間をかけた。最初の整備懇話会が設けられたのは1989年のことである。建築家の芦原義信氏を顧問に、当時、金沢大学教授の小堀為雄氏、金沢工業大学教授の水野一郎氏らがメンバーだった。懇話会が決めた方向性は「伝統と現代」を基本命題とすることである。伝統と現代の共存は、前金沢市長の山出（2018）によれば、金沢のまちづくりの宿命である。その方向性のもとで検討が積み重ねられ、伝統の象徴として木造の鼓門が、現代の象徴としてガラスの大屋根が設けられた。完成したのは2005年である。議論の開始から16年の歳月が経っていた（山出、2018、pp.66-72）。

2011年には、アメリカの旅行雑誌『トラベル・アンド・レジャー』のウェブ版で、金沢駅がフランスのストラスブール駅などとともに「世界で最も美し

い駅」14駅のひとつに選ばれた（山出、2018、p.69）。

金沢駅のデザインを特徴付ける鼓門は、伝統芸能である加賀宝生の鼓の形をしている。他の地域では真似することができない歴史性を備えており、水平的差別化といえる。

金沢駅は、現代建築としての機能と品質を備えている。また、伝統（木造）を取り入れたデザインである。その結果、現代との融合という美意識・価値観も有している。

現代技術を活かした機能品質は、垂直的差別化である。伝統を取り入れたデザインは、水平的差別化である。前者だけが多い駅舎のリニューアルにおいて、金沢駅は両者を有機的に結合した。「伝統」を踏まえながら「現代」を創り、「未来」を拓くという「伝統と現代の共存」が具現されている（山出、2018、p.72）。

新政酒造(株)と金沢駅に共通しているのは、伝統と現代の融合である。我々は、日本の伝統と、西洋由来の科学技術を別なものとして扱う傾向にあった。伝統は文化遺産として、科学技術は産業として取り扱う傾向にあった。しかし、それでは科学技術による垂直的差別化しか産業的に実現できない。日本の伝統は、水平的差別化に有効である。したがって、日本の伝統と科学技術を連動させることは、垂直的差別化と水平的差別化の連動につながる。これらの先進事例が示唆する地方創生・成功の方程式が伝統の現代化である。

5. 文化遺産と日本の景観

さて、これまで支配的だった状況をみてみよう。金沢駅と対照的なのが京都駅である（写真4）。現代建築の造形としては、京都駅の方が優れているのかもしれない。しかし、金沢駅は伝統である木造建築をなんとか取り入れようとしたのに対し、京都駅



写真4 京都駅

出所：筆者撮影

には、そのような発想はみられない。京都は優れた伝統文化と現代文化を別なものと考えているようにみえる。

日本を代表する古都である京都は、古い街並みや寺社仏閣を保存している。景観規制を設け、ビルの高さを制限している。伝統文化とは、古い文化遺産であると認識しているようだ。それは一つの見識である。日本の常識といってもいいだろう。しかし、そこに落とし穴があるのではないか。

文化遺産の保存は結構だとしても、街全体を文化遺産とすることは不可能に近い。木造2階建ての町屋だけで、現代の生活や経済活動を営むことは、特に京都のような大都市では困難を極める。街にはビルディングが必要だ。

京都のビル街は景観規制によって綺麗になった。スカイラインが揃い、看板がなくなった。しかし、その景観が京都らしいかと問われれば、微妙な感想を抱く。高層ビルが林立する前の、大阪御堂筋や東京丸の内を連想させる景観である（写真5）。



写真5 看板を撤去させた京都の街並み（河原町付近）

出所：筆者撮影



写真6 京都：軒庇を設けた現代住宅（西陣付近）
出所：筆者撮影



写真7 京都：鴨川の東岸から見える先斗町付近の建物
出所：京都市ホームページ

よそ者の勝手な感想かもしれない。しかし、それを重々承知のうえで、あえて申し上げれば、かつての文化遺産（木造建築）と、現代的な景観（ビルディング等）の間につながりが欲しい。景観規制が要求する軒庇を設けることは一つのアイデアだろう。しかし、規制は抜け道を誘発しやすい。結果として、いびつな伝統的形態の氾濫を招き、かえって混乱が生じている面もあるとされる（日本学術会議、2018、p.3、写真6）。

これは京都に限らず、日本全体の課題だ。わが国は、木造の低層建築文明に、鉄やコンクリートの高層文明を導入した。後者の経済効率は高く（規模の経済）、瞬く間に、あらゆる町に浸透した。戦災はそれを加速しただろう。しかし、戦災にあっていない京都ですら、その経済メカニズムから逃れることはできなかったのである。

すなわち、日本の景観問題とは、かつての伝統文化と、現代文化との接点を見失っていることに求められるのではないか。よくいわれるように、看板にはアジア的混沌の要素があるのかもしれない。但し、看板を撤去した京都ですら、ビルディングと町

屋の混在は、景観の混乱を招いている（写真7）。

6. 伝統の現代化という希望

伝統と現代の統一に希望があるとすれば、伝統文化を形としてとらえるのではなく、その内容、すなわち伝統を美意識や価値観として消化し、現代の建築等に活かしていく方向性であろう。そもそも、どのような特徴の景観を目指すかは、市民の価値観や美意識が決めることだからである（水野、2018、p.149）。

その答えを垣間見せてくれたのが、先に紹介した金沢である。金沢市は1968年に伝統環境保存条例を制定し、その後50年以上をかけて景観規制を練り上げてきた。その規制は一風変わっている。規制の多く（7割）は、例えば「周辺の街並みとの調和を図る」ように抽象的な文言なのである（川上ら、2012、p.78）。

これは結局のところ、施主の価値観や美意識に訴えるものだ。一見、迂遠で効果が上がらないようにみえて、実は王道といえる。景観規制は、いくら詳細化しても最後は主観で判断されるためだ（鳥海、2018、p.362）。

金沢には、住民や産業界の美意識を醸す仕組みがあちこちに存在する。代表的なのが21世紀美術館である。二代目館長の秋元氏が、着任にあたって当時の山出市長から依頼されたのは、「美術館をもっと市民に浸透させてほしい」「工芸を大切にしてほしい」というミッションだった（秋元、2017、p.32）。

2004年にオープンした同美術館には、市内全校の小学4年生約4,000人が来館して、展示を鑑賞するシステムがある。どんな生育環境の子どもたちも、小学生の間に必ず美術に触れられる環境をつくるために実施されている。これもコンセプトの「まちに開かれた」に込められた、子どもたちの学びの場だ。ここまでの公立美術館は前例がない（秋元、2017、p.28）。

21世紀美術館は、伝統を現代化する装置としても機能している。伝統工芸と現代美術を融合するシステムなのである。もっとも、工芸を大切にすることは難しい課題であった。現代美術を中心とする美術館にとって、伝統工芸は全くの別世界であったためだ。山出前市長のミッションは、伝統工芸が有している美意識や価値観と、現代芸術が有している美意識や価値観をすり合わせることを意味する。さまざまな試行錯誤の結果、金沢の工芸界には、現代芸術の要素を取り入れた「工芸未来派」が生まれている（秋元、2017、pp.73-76）

これは、作品の見た目が現代的でありながら、伝統的な技法や技術を再評価して、ときには伝統工芸を担う職人以上に原理主義的な態度をとる。埋もれてしまった技法を再発見したり再生したりして、現代の超絶技巧派の作家として紹介される人もいる（秋元、2017、pp.74-76）。秋元がネーミングした工芸未来派には、先に紹介した新政酒造(株)のやり方と共通点がある。

また、1978年には「金沢都市美文化賞」が創設されている。「景観の悪い」ものを規制するのではなく、「景観の良い」ものを選奨する賞である。行政ではなく民間の「金沢商工会議所」、「金沢経済同友会」、「金沢青年会議所」の経済3団体が主体であることが最大の特徴だ（金沢市、2018、p.132）。

選定基準は例えば「周囲のまちなみや地域の景観との調和に十分な配慮と工夫がはかられ、金沢にふさわしい新しい都市景観の創出に寄与しているもの」が選ばれる。そして、審査では、色彩が何点、材料が何点というような項目ごと評価ではなく、全体を総合的に判断して決定する（金沢市、2018、p.133）。これは、景観規制の抽象的な規制文と整合的である。

「金沢都市美文化賞」は、募集・審査・表彰の各段階を通して市民が景観を考える機会になってい

る。また、「金沢都市美文化賞の受賞を目指している」という設計者がいるように、建造物の質が良くなっている。年に10件程度、累計すると400件を超える良質な建造物等が生み出されている（金沢市、2018、p.134）。

結果として、金沢では、景観規制よりもむしろインセンティブが景観を改善しつつある。金沢の建築家は都市美文化賞を目指す。そのためには、先行受賞作と類似のデザインをすることが有利となる。受賞は、その後の受注に結び付く。この一連の流れは、優れた統一的なデザインの街並みをもたらす。すなわち、金沢は景観の改善を市場メカニズムのなかに織り込むことに成功しつつあるのである（写真8）。

これは、京都等の景観規制が市場の失敗を前提にしていることとは対照的だ。経済効率に反する規制は抜け道を探される宿命にある。その結果、デザイン的な観点は二の次となりやすい。それは軒庇規制等がいびつな伝統的形態の氾濫を招いていることに象徴される（日本学術会議、2018、p.3）。

結果として、金沢には景観に文脈が形成されたと水野（2018、pp.148-149）は指摘する。その文脈と



写真8 金沢：都市美文化賞の街並み（右端の新築及び右から2軒目の町屋修復が2016年度に受賞。左端は料亭、左から2軒目はリニューアル住宅。寺町付近）

注：右端の受賞建物は周囲と調和しているが、外壁から軒庇が突出していないため、京都では景観規制を満たさない。

出所：筆者撮影



写真9 金沢：格子のデザインを活用したオフィス
外観（青年会議所、香林坊付近）
出所：筆者撮影



写真10 金沢：オープンテラスと連動するホテルの
カフェ・ロビー（近江町市場付近）
出所：筆者撮影

は、歴史的重層性（バウムクーヘン都市）、分散立地（モザイク都市）、自然を尊ぶ（環境都市）、市民社会の自治（美文化都市）の4つである。

筆者なりに解釈すると、市民の美意識やそれを反映した建築家のインセンティブが、伝統建築から現代建築に至る建物間の文脈を見出していることを表現していると考えられる。

仮にそうであれば、水野（2018）が指摘する金沢の景観文脈は、日本全体に適用可能であろう。歴史的重層性と分散立地は、日本の伝統文化と西洋文化の混在による文脈である。これは、日本の景観が混乱している最大の要因であるが、逆手にとれば欧米にはない独特の文脈となる。その一種の混乱を文脈として整理するには、市民社会の美意識・価値観の醸成や、それを反映した経済メカニズムの構築が重要となる。

金沢におけるデザインとしては、例えば、格子が活用されている。芦原（1979）は、わが国では道路と内的空間を遮断する塀によって無表情で単調な街並みを形成していることが多く、全面的道路に対しては無関心となり、街並みを美化しようなどという意識は決して湧いてこないと喝破した（芦原、1979、pp.49-52）。

そして、芦原は数少ない例外として格子を指摘する。格子は、内外の空間秩序に流動性を与え街並み

を活気づけるのに重大な役割を果たしている（芦原、1979、pp.49-52）。この指摘は、建物内部から外の様子をうかがうことを通じて、街路とつながることができ、その結果、美観に配慮するようになることを重くみている。

金沢でも、そのような本来の機能を有する格子は茶屋街等に残っているのみだ。しかし、街並みのデザインとしては、新しい建物に広く用いられている（写真9）。ホテル、オフィス、医院、薬局、飲食店、住宅まで枚挙にいとまがない。また、ホテルのロビーやカフェが街路から見えるようになっていたり、オープンカフェ的につながっていたりするケースが増えた（写真10）。これは、格子の機能であった建物内部と外部の連携を果たしている。金沢のインバウンドは欧米系が多い。ホテルの多くは金融機関の跡地だ。閉鎖的な金融機関から、オープンな外人カフェへ。華麗な景観転身である。

7. コンパクト・シティから スマート・スプロールへ

美意識や価値観が洗練されてくると、都市だけではなく、郊外の景観も洗練される。その代表が、フランスワインの銘醸地である。ワインのブドウ畑とシャトーなど、関連景観はワインスケープと称される（鳥海、2018、p.18）。

ワイン産業はワインスケープを洗練させることによってツーリズムとしても成功を収めている。ツーリストの年収は高く、消費単価も高い。稠密なマスターリズムとは対極的なブランドツーリズムが成立しているのである。

一般的に、郊外の景観はスプロールが少なくなく、美観とは無縁の場合も多い。しかし、ワインスケープと称されるほどに、景観の美意識に敏感な銘醸地では、車や現代施設の利便性を活かしつつ景観に配慮しているケースが少なくない。これはスマート・スプロールと称される（鳥海、2018、p.374）

これまで、地方圏の都市は、スプロール化した現状を反省し、コンパクト・シティを目指す向きが多かった。しかし、新型コロナウイルスに象徴されるウイルス危機が一過性のものではないとすると、稠密空間を目指すコンパクト・シティにはデメリットも出てくる。

コンパクト・シティは、その語感からは想像できないほどの高密度を想定している。このアイデアは、ダンツィク&サアティ（Dantzig & Saaty、1973）による。200万人を直径5.3kmの巨大都市建造物に集積させることで、土地と移動を節約するアイデアだった。人口密度は907人/haに達する。東京都心3区の昼間人口の倍近い密度だ。マンハッタンよりも遥かに高い（図4）。

ここまでではないにしても、コンパクト・シティを目指すことは、高密度を求めることである。したがって、3密を避けるためには、コンパクト・シティからスマート・スプロールへの発想の転換が必要であろう。

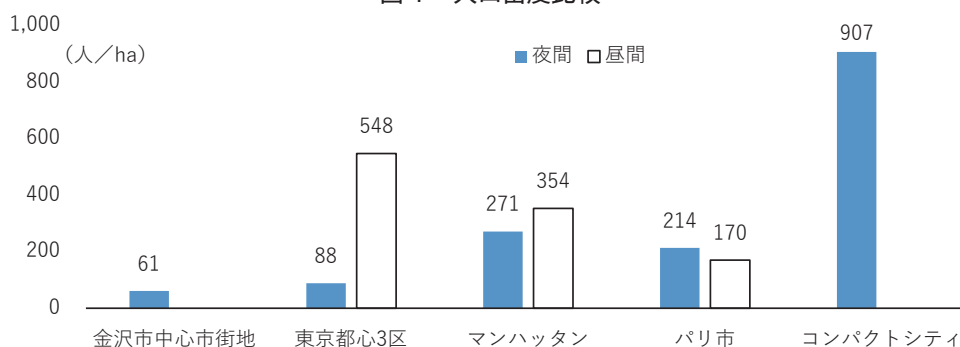
地方の中心市街地は、木造家屋が多かったこともあり、さほど人口密度が高くない。その密度を高めるのではなく、郊外に広がった市街地の景観をコントロールするような、スマート・スプロールの方が、ウイズコロナの時代には相応しい。

スマート・スプロールを意識したのかどうかは不明だが、金沢はそれに近い対応をしてきた。中心部の金沢城内にあった金沢大学と、その隣の県庁を郊外に移転し、跡地を芝生広場としたのである。これは、醸してきた美意識や価値観の発露であったと考えられる。結果として、コンパクト・シティとは逆の動きとなった。しかし、街の風景は美しく洗練された。市内におけるスマート・スプロールといえる。

また、金沢の郊外も景観に配慮した政策がとられている。例えば、石川県は北陸自動車道やのと里山街道などの幹線道路沿線について屋外広告物の設置を禁止している。これから延伸される北陸新幹線の沿線にもそれは適用される。郊外部では新幹線の両脇500メートルは同規制の対象となる。

白山の眺望に関する規制もある。石川県は、景観

図4 人口密度比較



出所：土地総合研究所（2017）、東京都（2013）、Dantzig & Saaty（1973）



写真11 鵜養地区：あぜ道の花

出所：筆者撮影

条例として、「いしかわ景観総合条例」を2009年7月に策定した。この条例では、景観法に基づく景観計画とは別に、自主条例として眺望計画を定める規定がある。この眺望計画には「眺望景観保全地域」が定められており、その一部の区域である「特別区域」において高さを規制する明確な数値基準が定められている（川崎、2010、p.2644）。

もっとも、制度だけでは十分でないことは先述の通りである。スマート・スプロールをワインスケープのように成功させるためには、経済的インセンティブを設けて市場メカニズムが働くようにする必要がある。

ワインスケープでは、ブドウ畑の景観が重要な位置を占める。ブドウ畑を美しく手入れすることは、観光客のためというよりも、ワインの品質を良くするためである。郊外の景観を形成する主体は、第一次産業だ。郊外の景観改善には同産業の景観を洗練させる関与者が重要となる。

その一つの候補が日本酒産業だ。先に例に挙げた新政酒造(株)は、秋田市郊外の鵜内地区で、無農薬の米を手掛けている。農薬が散布されていない田の畔道には、多くの花が開花して、美しい景観を形成している（写真11）。

また、富山の立山町では、元ドンペリの製造責任者が日本酒造りを手掛け始めた。隈研吾²が蔵の設計を行う。ワインスケープにおけるシャトーのよう



写真12 鵜養地区：全景

出所：筆者撮影

に景観に配慮した建築物を鳥海はアグリテクチャーと呼んでいる（鳥海、2018、p.372）。隈研吾による酒蔵はその候補だ。

第一次産業そのものにも同様のチャンスがある。ポイントは、例えば品質（垂直的差別化）と、無農薬や景観等の美意識や価値観（水平的差別化）を連動させ、ブランド化を図ることである。

8. ウイズコロナを視野に入れた 地方創生に向けて

安宅（2020a、pp.388-401）は、「風の谷」というビジョンを打ち出している。これは、コンパクト・シティの対極として、美しく自然豊かな空間を生み出すことを目指す。スマート・スプロールと通底するビジョンである。安宅は、3密とは無縁なこのビジョンがウィズコロナの鍵を握るとみている（安宅、2020b）。

それは例えば、新政酒造(株)が無農薬栽培を手掛ける秋田市鵜養地区が該当するだろう（写真12）。これらの地域において、日本酒や第一次産業を活性化させる。品質の向上による垂直的差別化を行うと同時に、地域資源との連動によって物語を創り（例えば、微生物テロワール）、水平的差別化も実現する。ウィズコロナを視野に入れた地方創生のあり方だ。

これは一言でいえば、伝統を、現代科学を踏まえて活用することに他ならない。

² 木と鉄やコンクリートを連動させる隈研吾のデザインは伝統の現代化の好例である。

このことは、市街地の景観改善にも重要なコンセプトとなる。伝統を美意識や価値観まで咀嚼し直し、現代の科学技術を適用することが、木と鉄やコンクリートとの景観連動を可能とするためだ。また、まちなかにもスマート・スプロールを適用し景観を改善することが観光再生に有効であることは、近年の金沢が証明している。

伝統の現代化が地方創生の希望である。日本を代表する芸術家であった岡本太郎は、「伝統は我々の生活の中に、仕事の中に生きてくるものでなければならぬ」と力説した（岡本、2004、p.270）。岡本によれば、わが国の文化遺産は推進力ではなく、むしろ呪縛として働いている（岡本、2004、p.281）。

しかし、そんなわが国においても、伝統を形ではなく、美意識や価値観として捉え直した成功事例が、地方から出始めている。伝統は、水平的差別化の有効な手段となる。そして、伝統を現代化し垂直的差別化を成し遂げれば、その差別化はキャッチアップし難い永続的なものとなる。地方創生の近未来はここにあるのではないか。

参考文献

- 秋元雄史（2017）『おどろきの金沢』講談社
- 芦原義信（1979）『街並みの美学』岩波書店
- 安宅和人（2020a）『シン・ニホン：AI×データ時代における日本の再生と人材育成』ニューズピックス
- 安宅和人（2020b）「そろそろ全体を見た話が聞きたい2」<https://kaz-ataka.hatenablog.com/entry/2020/04/04/190643>（2020年6月23日最終閲覧）
- 入山章栄（2017）「東大文学部卒がブランド日本酒作れたワケ：“日本酒テーマパーク”構想も推進中」<https://president.jp/articles/-/27545>（2019年4月25日最終閲覧）
- 岡本太郎（2004）『日本の伝統』光文社知恵の森文庫
- 金沢市（2018）『金沢 景観五十年のあゆみ』
- 川上光彦、矢後香織、小柳健、西野達也（2012）「金沢市における独自条例による景観形成基準の内容と運用実態」『日本建築学会計画系論文集』第77巻第671号、pp.75-83
- 川崎修良（2010）「眺望景観保全を目的とした建築高さ制限の手法についての研究：景観法施行後の各自治体の事例に着目して」日本建築学会計画系論文集 第75巻 第657号、pp.2643-2648
- 京都市「ホームページ」<https://www.city.kyoto.lg.jp/sogo/page/0000035078.html>（2020年6月17日最終閲覧）
- 佐藤淳（2020）『國酒振興に関わる新たな成長戦略を求めて－地域経済活性化へのインプリケーション－』日本大学、博士論文
- 山同敦子（2016）『日本酒ドラマチック：進化と熱狂の時代』講談社
- 東京都（2013）『東京都白書2013』
- 土地総合研究所（2017）「県庁所在地の平均人口とDID 面積の推移にみる市街地の拡散について」http://www.lij.jp/news/research_memo/20170831_3.pdf（2020年6月26日最終閲覧）
- 鳥海基樹（2018）『ワインスケープ：味覚を超える価値の創造』水曜社
- 日本学術会議（2018）「我が国の都市・建築の景観・文化力の向上をめざして」
- 水野一郎（2018）「金沢らしい景観を磨き続けたい」金沢市『金沢 景観五十年のあゆみ』 pp.148-149
- 山出保（2018）『まちづくり都市 金沢』岩波書店
- SAKE TIME「全国の日本酒ランキング2020」<https://www.saketime.jp/ranking/>（2020年6月23日最終閲覧）
- Dantzig, George B. and Thomas L. Saaty（1973）*Compact City*, W. H. Freeman and Company.（森口繁一監訳、奥平耕造・野口悠紀雄訳『コンパクト・シティ』日科技連、1974年）